

中国親族研究における個人への着目
——組織的親族関係から実践的親族関係への転換——
The Individual of Chinese Kinship Research:
The Conversion of Organizational Kinship to Practical Kinship

叶 宝華
YE Baohua

This paper reviews a selected bulk of literature on Chinese kinship being documented since 1990. Based on the findings, this paper proposes a new research perspective that focuses on the individual of Chinese kinship. Because the scope of previous studies is limited to “individual,” therefore, the definition of kinship is changing from organizational kinship to practical kinship. Individual is still the neglect of Chinese kinship research. And this paper tries to give special attention to focus on the agency of “individual” in order to strengthen the understanding of the flexibility of practical kinship of China.

キーワード：実践的 (Practical)、組織的 (Organizational)、中国親族研究 (Chinese Kinship Research)、個人 (Individual)、エイジェンシー (Agency)

1. 問題の所在

本稿は、中国親族⁽¹⁾研究の着眼点が組織的親族関係から実践的親族関係へと転換する様子を概観した上で、エイジェンシー概念を援用し、個人からの視点を新たな研究視座として提示することを目的としている。

中国社会における親族研究は、20世紀初頭から様々な研究者達に着目されてきた。1949年以前の研究は、宗族⁽²⁾の成員から構成される村落コミュニティにおける家族・親族を中心とした村民の社会生活を記述したものであった。それは、外部社会の影響を受けていないことを前提とした、静態的なコミュニティ研究として位置付けられている。20世紀半ばにはM・フリードマン(1958=1991、1966=1995)が、当時の構造機能主義人類学者が打ち出した「出自理論」に基づき、主にアフリカの「未開社会」に関する研究を中心に確立された「リネージ・モデル」⁽³⁾を中国社会に応用した。M・フリードマンはアフリカ社会におけるリネージ組織と中国社会を比較し、中国社会のリネージ内部における、社会的、経済的な分化が存在していることを見出し、共同財産こそが中国宗族組織の最も重要な条件であると指摘した。すなわち、M・フリードマンは親族組織の機能的な要素を強調しているのである。このような中国社会の特徴である父系出自原理を中心とした「リネージ・モデル」の応用は、「フリードマン・モデル」と呼ばれている。「フリードマン・モデル」は、親族組織の機能的な要素を強調しているため、本稿ではそれを「機能モデル」と呼び、後述する陳其南(1985=2006)の「系譜モデル」⁽⁴⁾と比較させながら検討する。

1949 年から 1978 年の改革開放まで、中国本土での現地調査はほぼ不可能であった。その代わりに台湾・香港で M・フリードマンの「機能モデル」を用いた検証研究が盛んに行われた。その時代の欧米人研究者の中国社会に関する親族研究は「フリードマン・パラダイム」と呼ばれている。だが、1978 年の改革開放を契機に、国外の研究者が中国本土でフィールドワークを行うことが可能となった。その結果、1980 年代から 1990 年代にかけて M・フリードマンの理論に対する批判研究が登場した。

以上の点を踏まえ、本稿では 1990 年代以降の新たな中国親族研究を概観し、その着眼点が組織的な親族関係から実践的な親族関係に転換していることを示す。加えて、個人の視点に関する先行研究を整理し、エイジェンシー概念を援用しながら個人の視点の重要性を主張する。次節では、組織的な親族関係に関する 1990 年代以降の先行研究を検討していく。

2. 組織的親族関係論

前述したように、1990 年代以降の中国親族研究は M・フリードマンの「機能モデル」の批判研究という特徴を有している。まず、M・フリードマンの「機能モデル」を用いて検証研究を行った研究者達は、親族組織を「機能的な集団」として位置付けて分析するのではなく、「純粋な系譜」⁽⁵⁾を重視しながら分析する方向へと舵を切った。言い換えれば、「機能モデル」から「系譜モデル」への転換である。さらに、1990 年代以降の研究は、「フリードマン・パラダイム」よりも研究視角という点において多様性を有している。例えば、中国東南部のみならず、中国全土を対象とした様々な研究が登場した。加えて、女性、個人などにも焦点を当てるようになった。そして、当時の中国社会における親族集団の独特な現象である、宗族の復興及び文化資源化などにも着目している。以下でその具体的な先行研究のレビューをしたい。

陳其南は、「西洋の人類学者は、一方で、漢人親族制度の純粋な系譜理念を理解できなくなり、機能集団の分析に終始し、またこのような分析を親族研究そのものと誤解することになった」（陳其南 1985=2006: 220）と指摘した。陳其南は M・フリードマンの「機能モデル」という欧米研究者の視点を根本的に見直し、漢人社会における独特な「房」⁽⁶⁾の概念を提起した。そして、「房」から形成した系譜こそが、純粋な親族関係を捉えられるといった「系譜モデル」を打ち出した。陳其南によると、「房」は一つの家族の内部関係を説明する上で、最も適切な単位であるという⁽⁷⁾。さらに、「系譜モデル」を通して、機能的親族集団の構成法則と組織形態を理解することができると指摘した。すなわち、「房」という「系譜モデル」が中国社会の親族関係を捉える上で適切だということである。

では、研究視角という点においてはどのような多様性があるのだろうか。まず、挙げられるのは地域的な多様性である。M・フリードマンの研究は中国全土を対象としたものではなく、中国東南部、主に福建省、広東省などの宗族が発達した地域を対象とした研究である。一方で、1990 年代以降になると、その領域は拡大し中国全土で研究が行われるようになった。例えば、聶莉莉（1992）は、東北の劉堡で調査を行い、改革開放後の社会の激しい変化に伴い、親族組織の構造及び親族関係が変容していることを明らかにした。その他にも、山西（陳鳳 2002）、安徽（韓 1995）などの地域を対象とした研究もみられる。

そして挙げられるのが、改革開放後の宗族復興と文化資源化現象に着目する論説が出現したことである。潘宏立（2002）は、閩南農村社会における宗族と関連する宗親会組織^⑧に着目しながら、宗族復興及び変容の原因について考察した。また、瀬川昌久（2004）によると、1980年代以降、広東人の始祖の居住地だと考えられるようになった珠璣巷には、多数の香港人や広東人が訪れるようになった。この現象により、珠璣巷は歴史観光拠点として建設された。瀬川は、中国本土における宗族復興と文化資源化とを関連付けながら論じている。

しかし、これらの先行研究は、国家政策または社会の変遷に伴い、親族組織の構造が変容していると論ずる傾向がある。研究視角という点には多様性があるが、これらの研究のいずれも、M・フリードマンの「機能モデル」と陳其南の「系譜モデル」の枠内において分析する性格を持っている。具体的に言えば、1980年代という特定の時代背景において、社会組織、村落行政組織、または、宗族と関連する宗親会組織などの、伝統的な血縁関係を背景とした社会組織のあり方及び変容について論じている。そして、これらの研究は、改革開放後の社会、経済、政治の変化に伴い生じた、親族組織の復興などの現象における、親族組織の統合化や分裂化などの構造的変容に着目している。要するに、これらの研究は、本質的な血縁関係または親族関係を前提としているため、そうした組織としての親族関係の変容を捉えてきた。これが組織的親族関係である。そこでは、個人の日常実践やその他成員との相互作用という点を捉えることはなかった。

本節で概観したように、1990年代以降の新たな中国親族研究は、本質的な血縁関係のもとに、親族組織を一つの集団として位置付ける傾向がある。こうした組織的親族関係を前提として、個人の日常的実践を検討することは不十分ではないだろうか。それゆえ、次節では、実践的親族関係論に関する論説を取り上げながら、組織的親族関係論から実践的親族関係論へと転換する様子を整理、検討する。親族研究において、個人を検討しようとするれば、こうした構造の変容に着目する組織的親族関係論の枠から抜け出し、実践的親族関係として検討する必要性があると考ええる。組織的親族関係から実践的親族関係への転換を基盤とするなら、親族関係における、個人からの視点を深めていくことができると考える。

3. 実践的親族関係への転換

本節では、実践的親族関係と実践コミュニティ論を結びつけて検討する。そうした上で、本稿で取り上げる実践的親族関係の様相を提示したい。

まず、2016年に出版された『＜宗族＞と中国社会——その変貌と人類学的研究の現在』（瀬川・川口 2016）は、日本の人類学者が宗族の定義に関して再考察した成果だと言えるであろう。瀬川昌久（2016）によれば、「宗族成員の関係は、宗族組織の構成員間関係というよりも、個人のネットワークの様な関係であり、宗族はこのネットワークの網の目の生成機構として、人々にとって、重要な社会関係資本の一つである」（瀬川 2016: 48）。

瀬川の議論は、宗族と構成員間関係を理解する上で、重要な方向性を提示したと考えられる。従来、先行研究では、宗族構成員の血縁関係や地縁関係などの本質的な親族関係が強調されてきた。しかし、園田茂人（2000）は、「血縁関係は人々を結合すると同時に、分離・離反させる」と述べている（園田 2000: 261）。これを念頭に置けば、宗族にお

ける人々の人間関係を考察する上で重要なのは、宗族組織の成員、または血縁集団の成員という共通点を前提条件として考えるよりも、ネットワークのような人間関係だと認識することではないだろうか。言い換えるならば、構成員と親族組織は従属関係ではなく、親族組織は、構成員の日常的実践により生成されたネットワークのような関係である。

そこで手がかりとなるのが、Yan Yunxiang (2009=2012) が『中国社会的個体化』のなかで提示した「実践的親族関係」である。Yan によれば、「『実践的親族関係』はフレキシブルなネットワークであり、個人行動者は広範囲の社会変化によって、このネットワークを利用できる」(Yan 2009=2012: 128)。また、「村民は、日常的実践のなかで常に親族成員との相互作用による親族関係の距離を決める」(Yan 2009=2012: 133)。したがって、親族関係は、構成員と他の構成員の相互作用により常に判断され、場合や相手によって常に変化しているフレキシブル (flexible) な関係である。さらに言えば、Yan は西洋社会において発展してきた個人の視点を中国社会の研究に導入したと考えられる。

ここで、実践的親族関係を詳細に検討するため、田辺繁治 (2003) の実践コミュニティ概念を援用したい。田辺によれば、実践コミュニティ概念は、制度的に構築されたハードな境界線がなく、人々の実践の過程において、社会的に組織され、展開し、変化していくということである (田辺 2003: 135)。つまり、実践コミュニティの概念を援用すれば、親族関係を検討する際に、いったん血縁関係といったハードな境界線をカッコに入れた上で、個人の相互作用に焦点を当て、個人の日常的実践から構築された親族関係を理解することにより、多面的に親族関係を把握することができるのだ。さらに田辺は、「実践コミュニティとは、帰属意識を育てるのではなく、またメンバーの間に揺るぎない「共同体的」な絆を築くものでもない」(田辺 2003: 25) と述べている。

要するに、親族関係を安定的な基盤から構築された組織だとみなす考え方は不十分であり、構成員たちは、必ずしも自分の親族集団に対して帰属感だけを持つのではない。親族関係の中では、個人の異なる意識により、矛盾や衝突などが生じ得る。親族関係を本質主義的に捉え、親族関係における構成員たちの共同活動や共有観念などだけに着目する論考では、このような個人間の矛盾や衝突などの不安定な要素が、排除されているのではないだろうか。少なくとも、このような不安定さは組織における小さな反発としか見られてこなかった。

したがって、本稿では、本質的血縁関係を前提とする組織的親族関係論の枠組みから抜け出す。個人を中心とし、他の構成員との相互作用によって形成された、常に変化する流動的な実践的親族関係として扱うべきだと主張する。個人の日常的実践から構築された親族関係を理解することは、多面的に親族関係を捉えることに繋がる。次節では、先行研究における、個人の視点に関する先行研究を検討していきたい。

4. 「個人」からの視点——構造と個人の主体性という二項対立的視点

本節では、個人の視点からの親族研究を整理した上で、これまでの親族関係における、個人の視点に着目する研究に提示された「個人」という視点は、親族構造と個人の主体性という二項対立的な渦に引き込まれたことについて検討していく。

中国親族研究において、個人の視点の重要性については 1930 年代にはすでに言及され

ている。林耀華（1935）は、村民の精神的な面、つまり村民の態度、意見などの心理的な面にも言及すべきだと指摘した（林 1935: 4）。そして、費孝通（1948=2017）は「差序格局」を提示し、「個人は、親族関係から生まれた社会のネットワークの中心である」（費 1948=2017: 27）と論じている。費によれば、親族関係を検討する際に、個人の視角は極めて重要だという。

しかし、以上の論考は親族関係において個人の重要性を提示しているが、そのいずれも、個人の視点から親族関係をいかに捉えられるのかには、具体的に言及していなかった。

そうしたなか、秦兆雄（2005）は個人の視点から、親族関係の変容について具体的に研究している。秦は、湖北省の漢人社会において、父系の出自と血縁原理が極めて重要であると同時に、個人の選択行為も重要であると強調している。加えて、宗族が組織化、または分裂化される場合にも、個人的な行動が極めて重要であり、個人の行動原理も考察すべきだと主張した（秦 2005）。つまり、宗族集団の統合と分裂という構造的な変容においては、個人の選択行為が重要なのである。しかし、秦は個人の視点から親族関係を理解しようとしたが、個人の選択により、親族組織の再統合、あるいは分裂などの構造的変容を論じるに留まっている。

一方で、秦は個人を単なる行為主体だと扱い、個人の行動原理を強調する（秦 2005）。けれども、個人の行動によってもたらされた構造の変化を論じるだけでは不十分ではないだろうか。田辺（2002）は、「合理的意思決定は補助的な手段であるとしてもけっして実践の原理ではありえないし、むしろ合理的計算が不可能だからこそ意識的ではないような実践感覚とその倫理によって次々に生起する状況に対応しなければならない」（田辺 2002: 7）と論じている。つまり、現状から見れば、個人の合理的選択により、構造の変容が生じた。だが、個人の合理的選択は、決して親族関係を変容させる唯一の要素ではない。さらに、親族関係の変容といった現象において、個人の合理的選択が作用していることに着目する秦の考え方は、個人を十分に理解することができないと考える。個人を理解しようとするならば、構造的変容における、個人の合理的計算のみに着目するのではなく、個人が色々な状況に対応し、いかに実践しているのかを理解するのが適切ではないだろうか。

Yan（2003=2017）は秦と同様に、個人の視点から考察している。Yan は従来の研究の多くは、家族構造と制度に着目するものであるが、個人の心理と行動方式についてあまりに言及されていなかったと指摘する（Yan 2003=2017: 6）。Yan は『私人生活的変革』のなかで、個人及び個人の感情生活に焦点を当て、中国農民の個人の主体性と、個人生活の転換について論じた。さらに、国家が個人の主体性を形成するプロセスに与えた影響についても論じる（Yan 2003=2017）。Yan の論説において最も特徴的なのは、親族関係の構造、制度などから分析するのではなく、個人の心理、主体性などの側面から考察したことである。つまり、Yan は、親族関係の構造を批判しながら、個人の主体性を強調していると考えられる。

さらに、Yan は、個人の主体性を形成するプロセスにおける、社会的な影響を強調している（Yan 2003=2017）。こういった考え方は、個人を社会的な影響を受ける行為主体だとする渦に巻き込まれる傾向があると考えられる。したがって、Yan が論じた個人からの視点は、個人の主体性を強調し、その個人と他者の相互作用にはあまり言及していなかった。こうした視点では、個人と他者との相互作用による、個人的実践から生み出された実践的

親族関係を明らかにすることに関しては、不十分であると考える。

本節では、1990年代以降、個人の視角からの先行研究を整理してきた。秦は、個人の合理的選択による構造的変容について論じている。一方、Yanは個人の主体性を強調したが、個人と他者とのコミュニケーションは無視されていると考える。いわば、これまでの個人からの視点には、構造と個人の主体性という二項対立が背後に潜んでいる。それゆえ、次節では、個人の他者とのコミュニケーションにおいて生成された共同性に焦点を当てて、個人のエイジェンシーに着目する視点を提示する。こうした視点は、構造と個人の主体性という二項対立を乗り越えることが可能であると考え。さらに、個人のエイジェンシーに着目する視点は、いかなる実践的親族関係を明らかにするのか、という問いについて検討していきたい。

5. 個人のエイジェンシーに着目する視点

本節では、個人のエイジェンシーに着目する視点を論じた上で、実践的親族関係を明らかにすることについて検討していきたい。

まず、前節で述べたように、費（1948=2017）は「差序格局」という理論モデルを提出した。（費 1948=2017: 26）。この理論モデルにおける「差」は、個人を中心に、広がっていく社会関係ということである。個人によって、生み出す社会関係は同じものではないので、個人が中心に広がっていく社会関係に差がある。そして、「序」は、権利と義務の不平等、或いは資源の支配による尊卑と上下関係などの中国社会のイデオロギーである。多数の学者が「差序格局」を検討する際に、中国社会の構造における序を無視し、個人の差を強調している。これに対して、Yan（2006）は、「差序格局」が意識（人格）に与えた影響を踏まえて、場合や相手によって、相手との距離を判断し、常に調整しなければならない柔軟（弾性）な人格（意識）を「差序人格」と定義した（Yan 2006: 211）。Yanが定義した「差序人格」は、場合や相手との関係を判断し、自分を調整する柔軟な人格である。

上述したように、Yanが提示した「実践的親族関係」と結びつけて検討すれば、フレキシブルな実践的親族関係をイメージすることができる。しかし、Yanは「差序人格」における、個人意識の定義、または、どのように相手との関係を判断するか、どのように自分を調整するかなどの問題については明らかにしていなかった。要するに、Yanは個人の視点を十分に説明しきれていないのである。そこで、以下では個人のエイジェンシーに着目する視点から実践的親族関係を検討して行きたい。

田中雅一（2006）によれば、エイジェンシーは、他者とのコミュニケーションにおいて生まれる、双方向的、相互交渉的な場の共同性に関係している。しかし、個人の存在は他者との関係に埋め込まれるが、一方的な主従関係ではない。個人は、他者との関係に生まれた共同性の中に力を生み出す。その力がエイジェンシーである。一方で、エイジェンシーは、他者とのコミュニケーションにより成立した共同性を変化させる力でもある。さらに、エイジェンシーも同時に変化していくと述べた（田中 2006: 16）。

エイジェンシーは、個人の中に生成したものであると同時に、個人の意識とは同一に捉えられないものである。エイジェンシーは、意識の一部分であるが、指向性がある。その指向性の先にあるのは、まさに田中が論じた共同性ではないだろうか。エイジェンシーと

相対的に理解すべきなのは、個人の相互作用により生成された集合において成立した共同性である。要するに、エイジェンシーの内核は、他者との相互作用により生み出された共同性ということにある。このような考え方からすれば、エイジェンシーは共同性に制約される一方で、エイジェンシーは、共同性に作用しながら共同性を変化させる力でもある。

実践的親族関係の場合では、個人が他者との相互作用により共同性を生み出す。そして、個人のエイジェンシーがこのような共同性の制限を受け入れながら、共同性にも同様に力を押し付けることができる。個人のエイジェンシーに着目する視点からは、個人の実践により形成された動態的、流動的な実践的親族関係を理解することができる。したがって、個人の相互作用により、実践的親族関係を描写しながら、エイジェンシーに着目する個人からの視点に基づき、実践的親族関係を動態的、多面的に捉える必要がある。

6. まとめ

第1節では中国社会における親族研究の動向を整理してきた。そして、第2節では、1990年代以降新たな中国親族研究における組織的親族関係を論じている先行研究を検討し、これらの研究は本質的な親族関係を捉える傾向があり、個人の日常の実践を検討するためには不十分であることが明らかとなった。これを踏まえ、第3節では、実践的親族関係に関する先行文献を検討した。そこでは組織的親族関係から実践的親族関係への転換を基盤とし、個人からの視点を深めていくことができると主張した。続いて、第4節では、個人の視点からの先行研究を概観し、親族関係の構造的変容、または形式上の変化といった現象に対する影響にのみ着目するような「個人」という視点からでは、実践的親族関係を十分に捉えられないことを主張した。第5節では、エイジェンシーに着目する個人からの視点を取り上げ、個人の実践によって形成された親族関係を理解することで、実践的親族関係を動態的、多面的に捉えられることを示した。こうした、個人のエイジェンシーに着目する視点は、実践的親族関係を明らかにするために極めて重要な視点だと考える。

註

- (1) 親族とは、血縁関係及び婚姻関係によって結ばれている人々の総称である。
- (2) 宗族という用語の最も広い定義は、同じ祖先から分かれた男系出自の親族である。中国における多くの地域で、親族組織は宗族と呼ばれている。
- (3) リニージ (lineage) とは、始祖を含む成員の構成が具体的に辿れる出自集団ということである。当時の構造機能主義人類学者たちは「出自理論」に立脚し、アフリカの小規模的であり、無国家社会におけるリニージ組織を研究した。このような研究が、後に、「リニージ・モデル」と呼ばれている。M・フリードマンは、このような出自理論に基づいて、「リニージ・モデル」を中国社会に適用した。陳其南によると、「人類学の著作には、リニージを族産或いは祠堂を持つ父系出自集団 (patrilineal descent group) と定義されている」(陳其南 1985=2006: 173)。つまり、M・フリードマンが中国社会に適用した「リニージ・モデル」は、共有財産を持つ父系出自集団とのことである。
- (4) 陳其南は、M・フリードマンが親族組織を機能的な集団だと位置つける論説を批判し、系譜により純粋な親族関係を検討すべきだと主張した。本稿では、陳其南の論説を「系譜モデル」と呼ぶ。
- (5) 陳其南は、男系出自の血縁関係に基づき書いた系譜により、純粋な親族関係を提唱した。

- (6) 房という語彙の範囲は、完全に系譜関係上の成員資格に基づいており、同居・同財・同産、あるいはその他のいかなる非系譜的な機能の要素とも関係がない。ここでは、M・フリードマンの親族組織を機能的な集団だと認識する視点と対立する。
- (7) 房と家族の相対性は、すなわち息子と父親の相対性である。一人の男子はその父親に対しての房を表しており、その息子に対してその家族の主人であることを表している(陳其南 1985=2006:173)。
- (8) 宗親会組織は、中国人社会によく見られる父系出自を基に作られた親族組織である。同じ血縁出自の親族組織から形成したものであるが、親族組織より広範囲の意味を持っている。同姓(苗字)の親族組織の連合であり、社会的性格を持つ親族組織である。

参考文献

- 陳鳳, 2002, 「祖先祭祀の実態にみる宗族の内部構造——中国山西農村の宗族の事例研究」『日中社会学研究』10: 96-114.
- 陳其南, 1985, 「房と伝統中国家族制度兼論西方人類学的中国家族研究」『漢学研究』3(1): 180-220. (=2006, 小熊誠訳「房と伝統的中国家族制度西洋人類学における中国家族研究の再検討」瀬川昌久・川口幸大編『中国文化人類学リーディングス』風響社.)
- Freedman, Maurice, 1958, *Lineage Organization in Southeastern China*, London: Athlone Press. (=1991, 未成道男・西澤治彦・小熊誠訳『東南中国の宗族組織』弘文堂.)
- , 1966, *Chinese Lineage and Society: Fukien and Kwangtung*, London: Athlone Press. (=1995, 田村克己・瀬川昌久訳『中国の宗族と社会』弘文堂.)
- 潘宏立, 2002, 『現代東南中国の漢族社会——閩南農村の宗族組織とその変容』風響社.
- 費孝通, 1948, *From the Soil*, Shanghai: Guancha. (=2017, 『郷土中国』江蘇鳳凰文芸出版社.)
- 韓敏, 1995, 「宗族の再興」曾士才・西澤治彦・瀬川昌久編『暮らしがわかるアジア読本・世界』河出書房新社, 79-87.
- 聶莉莉, 1992, 『劉堡——中国東北地方の宗族とその変容』東京大学出版会.
- 林耀華, 1935, 『義序の宗族研究』北京: 新知三聯書店.
- 瀬川昌久, 2004, 『中国社会の人類学——親族・家族からの展望』世界思想社.
- , 2016, 「宗族研究史展望——二十世紀初頭の「家族主義」から二十一世紀初頭の「宗族再生」まで」瀬川昌久・川口幸大編『＜宗族＞と中国社会——その変貌と人類学的研究の現在』風響社, 48.
- 秦兆雄, 2005, 『中国湖北農村の家族・宗族・婚姻』風響社.
- 園田茂人, 2000, 「制度としての血縁——ケーススタディから比較研究へ」吉原和男・鈴木正崇・未成道男編『＜血縁＞の再構成』風響社, 261-8.
- 田辺繁治, 2002, 『日常実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社.
- , 2003, 『生き方の人類学——実践とは何か』講談社.
- 田中雅一, 2006, 『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社.
- Yan Yunxiang, 2003, *Private Life under Socialism: Love, Intimacy, and Family Change in a Chinese Village*, Chicago: Stanford University Press. (=2017, 『私人生活的変革——一個中国村莊裏の愛情、家庭と親密関係(1949-1999)』上海人民出版社.)
- , 2006, 「差序格局与中国文化的等級観」『社会学研究』第4期: 201-46.
- , 2009, *The Individualization of Chinese Society*, London: Bloomsbury Academic. (=2012, 『中国社会的個体化』上海訳文出版社.)